

【主題】 創立150周年の節目に「つながる」「ひろがる」地域の核となる学校教育活動

【副題】 スタートアップ！地域の異世代をつなぐ幼保小連携とコミュニティ・スクール

【学校・団体名】 兵庫県尼崎市立立花小学校

【役職名・氏名】 校長 植木 加代子

1. はじめに

本校は、尼崎市のほぼ中心に位置し、校区は北に阪急神戸線、南はJR神戸線北の山手幹線に挟まれた位置にある。創立150周年の歴史の中で次々と分離を重ね、現在は特別支援学級を含む全17学級の中規模校となっている。

立花地区の歴史は古く、もとは広く柑橘類を栽培した地域で、収穫した果実＝橘（たちばな）を献上していたことに地域名の由来があるという。

8年前に現在の立派な校舎に新築され、美しい佇まいを見せている。廊下も明るく開放感がある。在学中の児童が、校舎が新しい学校＝歴史も新しい学校、に通っていると考えても不思議はない。

2. 本校の現状とめざす学校像

コロナ禍の只中、本校は児童の健康を守ることを最優先に、行事や地域との関わりをほぼ凍結していた時期があった。2年前に着任した当時はその渦中であり、学習に重点を置いて児童も落ち着いていた。行事や会議の削減が功を奏して、勤務時間の適正化も進んでいた。一方で、様々な関わりや行事をもたないことによる影響や課題も散見された。

“地域の核となって「つながる」「ひろがる」立花小学校”を実現することが、全ての課題の克服と成長と学校の発展への道だと直感し、学校運営の軸とすることに迷いはなかった。コロナ禍ではあっても子どもが地域の方を中心とする様々な人と関わるができる工夫をするところから学校運営に着手した。

まず取り掛かったのは、着任と同時に尼崎市のモデル校に指定された幼保小連携である。次にとりかかったのはコミュニティ・スクールの実現である。ちょうど本校は創立150周年を迎えようとしていた。150周年を機会に、学校も地域も盛り上げ、明るく元気になる学校づくりをしよう。そう決めた。この絶好の機会を逃す手はない。

不可欠な協力者がPTAである。本校PTAは時代を先読みし、思い切ったスリム化を図っていた。その際削減した部分を埋め、うまく融合し呼び戻すことができた組織が、コミュニティ・スクールと150周年記念事業実行委員会であった。

3 「つながる」「ひろがる」取組の具体例

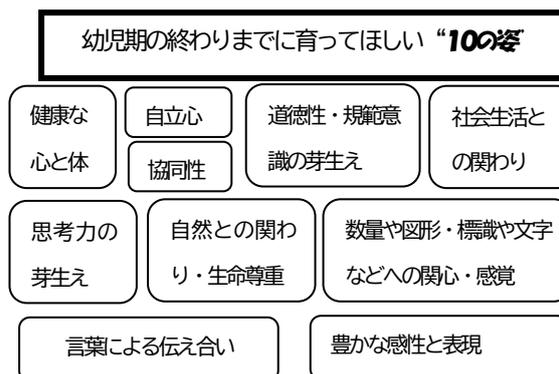
(1) 尼崎市幼保小連携モデル校として

モデル校に指定されたと知った際、心に決めたことがある。特定の学年だけの取組にしないこと、全校で関わるということである。

そこで初年度は関西国際大学教育学部椋田善之准教授による研修や幼稚園・保育所との連携研修も、可能な限り全教職員で参加した。

幼保小連携では大きく分けて3つの取組がある。一つは交流活動である。しかしさらに重要な取り組みが2つあることを、モデル校になって初めて知った。「アプローチ・カリキュラム」と「スタート・カリキュラム」である。初年度は理解と実践が結びつかず焦りが先に立っていた。しかし、子どもの視点に立てば至ってシンプルで、就学前に小学校を見据えた「アプローチ」と、入学後無理なく緩やかに小学校生活に馴染むため「スタート」のカリキュラムを実践するということである。

全体を貫く柱は、『幼児期から小学校への学びの連続』（文部科学省）の視点である。



①アプローチ・カリキュラム

上図の“めざす10の姿”を育むために、幼稚園や保育所が努力されている様子を、公開保育の機会に小学校教員は知ることができた。施設が隣接している利点を活かし、担任であっても午前の業間休みなどの寸暇を見つけては参観に出かける努力をした。これについては、教員は想定以上に興味をもち、熱心に参観に出かけていた。大きかったのは、その際に、遊びのねらいや個々の園児の目標、指導案の見方などを、説明くださった園長先生の努力だ。担任が一人一人の子どもの特性を知り、目標を設定し、成長を見とっておられることに、学校は就学前教育に改めてリスペクトをもって理解を深めることができた。

②カリキュラム・マネジメントによる各学年交流

本校は校内研究でカリキュラム・マネジメントについて取り組んでいた。そこで、イベント的に交流を行うのではなく、各教科の学習の年間計画の中で、相手意識をもって取り入れることにした。年間計画表には、幼保小連携、地域、学校行事の欄を設けた。

教員や児童の主体に任せるところ、ほとんどの学年が園までの送迎をし、ペア活動も行なっていた。例えば2年生は班ごとに読み聞かせをしていたが、途中飽きてどこかへいってしまう園児もいるのでは、と児童が想定し、その際の対応まで考えていたことに驚かされた。

教科横断的交流の例			
1年	国語	じどう車ずかんをつくろう	園児に見せてあげる
	生活	ようこそ小学校へDVD制作	近隣園に配布
2年	国語	お気に入りの本をしょうかいしよう	選んだ絵本を園児に読み聞かせする
	総合	尼いもを植えて芋ほりをしよう	尼いもの説明と芋ほり、芋のプレゼント
3年	総合	私たちがのんびり	鑑賞と、みんなで合唱
	社会	私たちの尼崎	
4年	音楽	市音楽会の曲披露と園児と合唱	
5年	総合	七夕かざりと遊びみんなで歌う	一緒に笹飾りをして歌を歌う。
	体育	体育大会の演技とリレー練習	迫力ある演技やリレーを間近で見学する

※特別支援学級児童は交流学年で参加



2年生が読み聞かせ



3年生と園児と一緒に芋ほり



「がんばって準備してよかったとの感想が。」

各学年児童は年間1回の活動でも大きく成長した。特に自己肯定感の高まりや相手意識をもった学習効果が見られた。園児は交流だけでも6学年分6回学校を訪れている訳である。

その他、2月には学校の教室でランチ体験と小学校のトイレ体験を実施した。これらにより、学校に慣れるだけではなく、体育座りできちんと最後まで話が聞ける園児へと大きく成長・変容する様子が見られた。

特に繊細であると聞き、交流で見守ってきた園児は、今春入学後毎日笑顔で登校し、安心して小学校に馴染む様子が見られる。これも、担任の努力に加え、アプローチおよびスタート・カリキュラムと、交流の成果も大きいと感じている。

③スタート・カリキュラム「きらきらタイム」

今年度の1年生は、笑顔で毎日登校し、登校渋りの児童がほとんどいない。学年の特徴もおそらくあるだろう。初年度であった昨年度は、朝登校時に泣いて保護者と別れられない児童や、教室から飛び出す児童などが多かった。あらゆるタイプの児童を緩やかに包み込み、優しく見守りながら小学校生活に慣れるように教育課程に取り入れたものがスタート・カリキュラムであり、本校では「きらきらタイム」と呼んでいる。これは、児童にとっても保護者にとっても学校にとっても、大変有効なカリキュラムだというのが3年目に入った感想である。

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
1年生
2年生
3年生
4年生
5年生
6年生

1校時開始ライン

上表は1年生の4月からの月別時程表である。「きらきらタイム」が6月7日と徐々に短くなり、通常校時授業に緩やかに入っていくことがわかる。

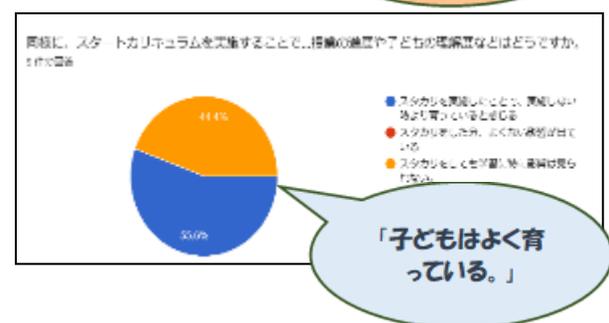
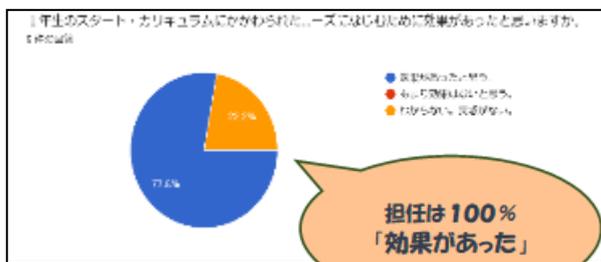
不安の強い児童やその姿に焦る保護者、担任、全てのケースについて、登校したら好きな遊びのできる時間のゆとりが、焦りや追い立て、叱りつけなどを防いでくれる。号泣していたと思ったら、砂場で夢中で遊

んでいる、というように、気持ちの切り替えの時間になる。もちろん専科教員や、地域のボランティアなど、始めは総動員で鉄棒や遊具、砂場、お部屋、などで見守る必要はある。この見守りは、実は貴重な“みとり”となり、たくさんの大人が子どもを知ること、学校全体で子どもを見るチームづくりに役立つ。

そして6月末頃には通常校時で自然に座学に入ることができるようになる。家で「学校に行ったらたくさん遊べるねん。」と喜んで話す児童も少なくないと聞くなど、保護者からも好評である。

もう一つ嬉しかったことは、4月に1年生担任と決まった教員が、すぐに幼稚園や保育園に行き、歌遊びや手遊び歌などを教わりに行っていたと、後から聞いたことである。

一方で、教員の負担感は大きいのではないかと心配でもあった。せつかく勤務の適正化が進んでいたところに始まった連携である。そこで、令和4年度2学期、職員にアンケートを取った。実施にあたっては、不要な負担を減らし内容を精選する目的であることを伝えた。その一部が下の通りである。



ほとんどの教員が取り組んでよかったと回答し、特に当事者である1年生担任が100%やってよかった、学習にも良い影響が出ていると答えていることで、幼小連携の重要性を感じた。

(2) 創立150周年実行委員会の発足と

コミュニティ・スクール

本校に着任した当時、周囲からは150周年記念式典は実施するのかと聞かれることが多かった。自分自身、立花地区のことを全く知らない状態であったため、

どちらの決断も安易にすることはできないと感じていた。さらに、周年行事は地域が主体であるとも聞く。地域に開かれた温かい学校づくりのためには、コロナ禍で地域との交流が途絶えていたこともあり、まずは地域と学校が交流し、相互理解を図ることが急務だと感じた。

①コミュニティ・スクール始動

まず、避難訓練の集団下校に、登下校の見守りをしてくださっている方々をお招きし、集会や写真掲示で紹介した上で、一緒に下校していただく活動を始めた。読み聞かせや園芸などのボランティアの方の紹介の会や感謝の会も、年間計画に盛り込んだ。学校よりも掲示板上に拡大掲示した。

地道な取組を重ねる中、徐々に学校に協力的な方々と話ができるようになってきた。地域への感謝や、子どもたちの未来のためにも150年の節目を大切にしたいとの思いに共感いただいた方々の輪も広がっていた。草の根活動である。

尼崎市では令和6年度には全小学校でコミュニティ・スクールを発足させることになっている。そこで、各町会長や民生児童委員、補導委員、見守りや読み聞かせや園芸のボランティアの代表者の方などにお声かけをし、自然と学校運営協議会のメンバーは決定することができた。

②創立150周年記念事業実行委員会の発足

地域の方々は当初より皆学校の負担を慮ってくださり、学校の意志の尊重と協力を申し出てくださっていた。しかし実行委員長や実行委員となると当初は難航した。無理もない。新しくやってきた校長である。しかし草の根活動から、実行委員長も実行委員も円満に決まり現在に至る。ほとんどが学校運営協議会の委員の方である。委員の方々は熱心に、本校教育の深い理解を示しながら熱心に取り組んでくださっている。



③子ども主体の取組～現在進行形～

本校が150歳の誕生日を迎えるということが児童に浸透した取組の一つに、令和3年度に実施した記念ロゴ募集がある。応募のあった図案を匿名で廊下に掲示し、タブレットで投票させた。投票には学校運営協議会や教職員も加わった。詳しく書き添えられたキャ

ラクターのプロフィールや投票を楽しむ姿から、学校への愛着が育っていることが感じられた。

今後は尼崎市歴史博物館の方より地域の歴史の授業を受け、来たる10月の「お祝いの会」に臨む。これは児童会が主体となり、PTAが全面支援する会である。「10年後の自分へ」ハガキを書き、地上保管のタイムカプセルに、会の中で公開収納する。盛り上げようとイベント企画は進んでいる。

4 「つながる」「ひろがる」卒業生～地域

(1) トライやるウィークで「つながる」掲示

令和4年度のトライやるウィークでは、本校の卒業生である中学2年生が校舎正面の児童玄関上のガラスに掲示するメッセージを作成してくれた。立体的に工夫し、低学年にも読める配慮のある素晴らしい掲示物である。通用門や道路、運動場からよく見え、児童や保護者は卒業生の温かい眼差しを感じている。



(2) 校歌で「ひろがる」世代を超えた輪

本校の校歌は歌詞も旋律も美しく、卒業生在校生ともに愛着をもっている。今年5月7日、実行委員会の発案でホームカミングデーが開催された。卒業生が集い、世代ごとに校歌を歌う様子を録音録画した。児童は授業で学年ごとに職員とともに録音録画した。共通の伴奏とした演奏は、令和4年度の文化庁による子供のための芸術鑑賞会で、アマービレ・フィル・オーケストラに、映像を式典に向けて制作することを見越してアレンジを依頼したものである。録音に向けて、1年生には6年生が模範で歌い、つきっきりで校歌を教える時間をとっていた。当日は自信をもって難しい言葉もリズムもしっかりと歌えており、立ち会った大人が感動して涙したという場面もあった。まさに「つながる」機会をまた一つもつことができた。

今から子どもも大人も、映像の出来上がりをととても楽しみにしている。このワクワク感こそが、学校運営における取組のねらいである。

④新しい形でのPTAとコミュニティ・スクール

本校PTAはコロナ禍を機会に思い切ったスリム化を図っていた。昨今、PTAが任意団体であることから、苦悩の種になっているケースも少なくない。本校がピ

ンチをチャンスにし、WIN・WINの方向へ舵を切ることができたのは、PTAをコミュニティ・スクールの一団体と考えるという視点だった。

以前はボランティア活動のほとんどを現役保護者であるPTAが担っていた。しかし時代は変わり仕事をもつ母親が増え、役員を選出が難しくなってきた。そこでPTAは、役員は執行部に絞り、学校行事の手伝いは都度ボランティアを募る方向にした。SNSを駆使し、来校するのは参観日に合わせて、など働いていてもできる執行部を目指していた。

一方、愛護部や人権学習部などは地域との関わりもあり、削減を惜しまれていた。そこでそれらをコミュニティ・スクールの団体にし復活させることで、子どもが小学校を卒業しても関わることができ保護者も世代間交流ができるシステムにすることができた。

その移行を形作るために150周年が良い機会となった。学校に度々人生の先輩方が足を運んでくださることはありがたい。

PTAが作成する150周年の準備の進捗を発信するかわ



実行委員長賞
に輝いた児童
の口

4、まとめ

いずれの取組も現在進行形のものであるが、コロナ禍で閉塞感に満ちた中で3年を過ごした子どもの安心感を高め、笑顔を増やす取組であると確信している。そして、地域に開かれた学校として核となる形を、150周年の事業が終わっても継続できるような無理のない仕組みを整えていきたい。

学力は未来を切り拓くために向上させるものだが、夢や志があつてこそ向上するものだと考えている。

これからも、TPOに合った挨拶を大切にし、人としての感謝を携え、学校運営に邁進する所存である。